

教材活用例(4) 「心のたすきをつなぐ」

〔小学校高学年 主題：集団の役割と責任の自覚 内容項目：4の(3)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—広島県立世羅高等学校陸上部—について〉

男子は、全国高校駅伝競走大会第1回、2回と連続優勝を果たし、創世記の全国大会に「世羅」の名を知らしめ、確固たる伝統をつくりあげた。過去40回出場し、6度の全国制覇をはじめ、29度の入賞を果たしている。

女子も、全国高校駅伝競走大会に5年連続で出場を果たしている。

「速い選手より、強い選手に」を部訓とし、「自主・自立」をテーマに部活と学業の両立をめざし、努力している。



男子全国高等学校駅伝競走大会
優勝記念碑ロード
【広島県立世羅高等学校】

(イ) 4コマ絵

全国大会のメンバーから外れ落ち込む大介が、仲間たちとの関わりを通して集団の一員であることを意識し、自分自身を見つめ、考える場面を中心場面として起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	<p>大介は、世羅高校陸上部に入り、全国高校駅伝競走大会で選手として走ることを目標に練習に励み、広島県予選では、2区を走り、区間一位の走りで見事に優勝に貢献した。</p> <p>しかし、大介は、全国大会出場の10人のメンバーの中には入ることができたが、選手からは外れてしまい、補欠として選手のサポートに回るようになった。</p>	<p>練習する気がおこらず、グラウンドにたたずむ大介は、仲間たちが練習する姿を見ながら、これまで自分自身も仲間達に支えてもらって走ってきたことに気付く。</p>	<p>仲間の一人からの声かけから、チームの優勝に向けて自分にできることは何か考え、ベストを尽くそうと決心する。</p>	<p>大会当日、大介は選手のサポートに回り、仲間たちを支えた。</p> <p>世羅高校が、優勝したとき、大介はそれを心から喜ぶ。</p> <p>優勝パレードでは、すがすがしい気持ちで優勝旗を掲げる大介の姿があった。</p>

イ 資料の解説

【作成の要点】

世羅町は、「駅伝の町」とよばれるほど駅伝がさかんな町である。中国実業団駅伝をはじめとし、「世羅駅伝」「甲山駅伝」「世羅西駅伝」など、児童生徒も参加できる駅伝大会やマラソン大会が数多く開かれる。また、世羅高校陸上部は、全国高校駅伝で優勝経験のある強豪校で、町のあちらこちらで陸上部員たちが練習している姿を見かけることができる。駅伝は、世羅に住む児童にとって身近に感じることでできる素材である。そこで、駅伝を通して集団の中の役割や責任の自覚を考えさせたいと考え、資料の素材として選んだ。

高学年になると、学校での委員会活動やクラブ活動、地域のスポーツ少年団などの集団活動を通して、責任ある役割を受けもつ経験が多くなる。それにおける集団と個の関係は、集団の中で一人一人が個として尊重され、生かされながら、主体的な参加と協力の下に集団全体が成り立ち、その向上が図られるものでなければならない。そのためには、集団に所属する一人一人が、その集団の意義に気付き、その中で自分の位置や役割を自覚して責任を果たすとともに、主体的に協力して全体の向上に役立とうとする態度をもつことが重要である。

そこで、資料作成にあたっては、全国大会出場メンバーから外れて落ちこむ大介が陸上部の仲間たちとの関わり合いを通して、チームの一員としての自分の在り方を考える中で、集団の一員としての自分の役割を自覚し、集団の向上のために頑張ろうとする心情を育てることをねらいとして設定した。

この時期の児童は、自分の役割や責任に対する自覚が深まり、責任をもって行動したり、友達と協力したりできるようになる。しかし、やるべきことが分かっているにもかかわらず、目の前の楽しさに気を取られ、協力して取り組めないときもある。そこで、与えられた役割に対して、主体的に責任を果たしたり、みんなで協力したりすることで、そこに自分がいる意味や周りの人が喜んでくれるうれしさを実感できることに気付くようにしていきたいと考える。

駅伝では、個人の力も大事ではあるが、チームの力が大事になってくる。選手だけでなく、それを支える仲間たちの存在があってこそ、練習以上の力が出せるのである。チームが勝つためには部員全員がそれぞれの役割を果たすことが大切になってくるということを考えさせるために駅伝を素材として選んだ。



【心に響くちょっといいはなし】

世羅高校のある地区の運動会のプログラムに「健康マラソン」がある。地域の子どもから、お年寄りまで参加するマラソンなのであるが、そのマラソンに毎年、世羅高校陸上部の部員たちが参加している。

スタートの合図とともに、走ることに自信のある小中学生は、陸上部のお兄さんたちに負けまい、離れまいと全力で走っている。お年寄りたちは、マイペースで完走を目指して走っている。

陸上部員たちは、小中学生に合わせて走る者あり、お年寄りに合わせて走る者あり、みんなが「世羅高校の陸上部の人たちと走ったよ。」と思えるような工夫をしてくれている。

「若いもんが一緒に走ってくれると最後まで走ろうという気になるよのう。」

と、地域のお年寄りは言われる。

陸上部員たちは、地区民運動会で走ることで、地域への感謝の気持ちを表している。



健康マラソンで地域の人たちと走る世羅高校陸上部員

ウ 資料全文

「心のたすきをつなぐ」

大介は、小さいころから走ることが大好きだった。中学校では陸上部に入り、練習を重ねていった。自己記録をこう新するたびにますますやる気になり、練習にも力が入った。

大介の住んでいる町には、駅伝で有名な世羅高校がある。これまで何度も全国大会に出場し、何度も優勝をしたことがある。

「自分も、高校生になったら全国高校駅伝に出て、京都の町⁽¹⁾を走ってみたい。」
と思うようになった。

高校に進むとき、大介はまよわず世羅高校を選び、陸上部に入った。

高校に入ってから大介は、「全国大会に出る。」という目標に向かい、一生懸命練習にはげんだ。世羅高校の陸上部には、同じ目標に向かってがんばっている仲間がたくさんいた。仲間たちががんばっているすがたを見ると、「自分もがんばるぞ、負けるもんか」とやる気がわいてきた。

3年生になった。大介は、広島県予選に選手として走ることになった。大介は、全力で走り、区間賞⁽²⁾をとることができた。チームも大会新記録で優勝し、全国大会への切符を手に入れることができた。

この調子で行くと全国大会でも走ることができるかもしれない。大介のむねは期待でふくらんだ。全国大会が近づくとつれ、監督は、
「優勝しよう、今年は勝ちに行く。」

と言われるようになった。

「選手になってもならなくても一人一人が目標を持ち、強い気持ちで練習をしなければ、優勝はねえない。」

とも言われた。勝ちたい思いは大介も同じだった。

「先ばいたちができなかった優勝。自分たちが三年生になったときに必ず優勝する。」

仲間たちと、いつも話してきたことだった。

いよいよ、メンバーの発表の日がやってきた。大介は、期待と不安の中、自分の名前がよばれるのを待った。だが、メンバーの中には大介の名前はなかった。大介は、補欠として走る準備をしながらも、五区の選手のサポートにまわることになった。

「陸上部員全員で優勝を勝ち取ろう。一人一人、何ができるかをよく考えてくれ。」
監督の声が、どこか遠くから聞こえてくるような気がした。大介は、監督の言葉を聞きながら、こぼれてきそうな涙をぐっところらえた。

次の日もいつも通り練習があった。練習しなければいけないことは分かっているのに、足が前へ進まなかった。

「練習しても、全国大会で走れないのに・・・。」

大介は、グラウンドに立ち、仲間たちが練習しているのを見つめていた。その時、選手の一人が通りがかりに大介のかたをぽんとたたいた。

「大介、ありがとう。」

思いがけない言葉だった。「いっしょに練習しているだけなのに、自分が役に立っているのか？」

大介はとまどった。

「そういえば……。」

大介は、広島県予選の時のことを思い出した。

予選の日は雨だった。コンディションの悪い中走るのは大変だったが、それほど心配はしていなかった。サポート役の仲間が、大介達選手が安心して走れるように、大会コースの下見に行き、実際に走り、道路の状態や走りやすいコースを教えてくれていたからだった。その上、雨の中、大介の荷物の運搬や飲み物の準備、天候や風向きの確認をしてくれた。いつもそばにつきそってくれ、心強く感じていた。

そのおかげで、大介は、たすきをつなぐことだけを考え、走ることに専念することができた。

「ぼくが走る時、いつも仲間がいてくれたんだ……。」

「大介。」

名前をよばれてふり返ると、仲間の一人がにこにこしながら立っていた。かれもまた、選手になれなかった一人だった。

「もう練習は始まっているぞ。みんなが待っているから、早く行こう。優勝するんだろ。」

「それは分かるけど、おまえはくやしくないのかい。もう、たすきをつなげないんだぞ。」

「何言ってるんだよ、ぼくたちだって、ちゃんとたすきをつないでいるじゃないか。」

そう言うと、あたりまえのように、練習している仲間たちのところへもどって行った。

「ぼくたちもたすきをつないでいる……そうか！」

大介は、大きくうなずくと、はずむような足どりで仲間たちの方へ走って行った。

平成21年12月20日、全国高校駅伝競走大会で、世羅高校は六度目の優勝を果たす。大介は、選手としての準備をしながらも、五区の選手のサポートにまわった。コースの下見を行い、選手の荷物を持ち、レース前にはげました。

大会が終わった後、歓声にわく競技場で、大介は、こうインタビューに答えている。

「自分が走ることより、チームが優勝することの方がうれしいです。」

大介の心からの思いだった。

翌日、優勝の歓喜にわく世羅の町で、優勝パレードが行われた。パレードの先頭のオープンカーで、優勝旗をほこらしげに持つ大介のすがたがあった。



【注】

- (1) 1950年から始まった大会で、1966年から現在の都大路（京都）が舞台となった。
- (2) 各区間を最も速いタイムで走ったランナーに与えられる賞。（※男子は7区間）

【参考文献】

- 月刊陸上競技 2010 2月号 講談社
陸上競技マガジン 2010 2月号 ベースボールマガジン社
中国新聞 平成21年12月21日付

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

仲間とのつながりを意識し、自分の役割を考える展開A
～ 「たすきをつなぐ」のキーワードに着目した指導 ～

(ア) 主題名 役割と責任の自覚 4－(3)：小学校高学年

(イ) ねらい 全国高校駅伝大会に出ることを目標に努力をしてきた大介が、チームの優勝のためにがんばろうと決意したときの気持ちを考えることを通して、集団の一員としての自分の役割を自覚し、集団の向上のために頑張ろうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「心のたすきをつなぐ」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 たすきを見て、知っていることを話し合う。	○ 何に使うのでしょうか。 ・ 駅伝のたすきだ。 ・ 選手がつないでいくものだ。 ○ たすきをつないでいる映像を見る。	○ たすきのもつ意味、たすきをつないでいくことの大変さを感じ取らせる。
展開	2 資料を読んで考える。 3 自分の生活を振り返る。	○ 「監督の言葉を思い出しながら、こぼれきそうな涙をぐっとこらえた大介」は、どんな気持ちだったでしょう。 ・ 一生懸命練習してきたのに。 ・ ぼくは走れないけど、優勝したい。 ・ 走れないぼくに何ができるのだろう。 ○ 自分が選手として走った時のことを思い出した大介はどんなことを考えたでしょう。 ・ 仲間たちがいつもそばにいてくれて安心して走れた。 ・ サポートしてくれる仲間がいたからたすきをつなぐことができた。 ◎ 大介は、仲間たちの方へはずむように走って行きながらどんなことを思っていたでしょう。 ・ サポートとしてのたすきをつないでいこう。 ・ ぼくも仲間の一人なんだ、優勝に向けてがんばろう。 ・ みんなと一緒に練習することで、チームが優勝できるかもしれない。 ○ あなたが、集団の一員としてがんばっていることは何ですか。 ・ スポ少の野球で、試合には出られないけど、声をしっかり出して雰囲気作りをしている。	○ 「たすきをつなぐ」意味を考えさせるために、資料名は最後に提示する。 ○ 「選手になってもならなくても」という監督の言葉に目を向け、チームの一員としての在り方についても考えさせる。 ○ ペアで考えを交流する。 ○ 仲間たちがともに練習し、支えてくれたおかげで走ることができていたことに気付かせる。 ○ 「走らなくてもたすきをつないでいる」とは、何を指しているのか考えさせる。 ○ ワークシートに考えを書かせ、交流する。 ○ 価値ごとに整理し、意図的指名を行う。 ☆ 書く活動を通して、「たすきをつなぐ」という意味を自分なりにとらえ、チームの一員として前向きに自らの役割を果たそうという大介の考えを押し量ることができたか。 ○ 事前に児童からアンケートをとっておき、それを紹介する。 ○ みんなをまとめたり、助けたりしていることを中心に出させる。
終末	4 メッセージを聞く。	○ 大介君からのメッセージを聞きましょう。 ・ 大介は、サポートを自分の役割としてがんばったから、優勝してうれしいと思ったんだ。 ・ 陸上部全員が心一つにして頑張ったから優勝することができたんだ。	○ 全国大会後の満足感を伝え、一人一人が集団の一員としてがんばることが優勝という結果につながったことを感じ取らせる。

自己の役割や責任の自覚から、集団の目標達成について考える展開B

～ 役割を果たした後のすがすがしさに着目した指導 ～

(ア) 主題名 役割と責任の自覚 4－(4)：中学校

(イ) ねらい 「そうか」とうなずいたときの大介の気持ちを考えることを通して、集団の一員として自分の役割や責任を果たすことが、集団の目標達成につながることを理解し、仲間と協力し合って集団生活の向上に努める態度を育てる。

(ウ) 資料名 「心のたすきをつなぐ」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点 ☆評価の観点
導 入	1 映像を見て、感想を交流する。	○ DVDを見て、思ったことを交流しましょう。	○ 映像を見ることにより、世羅高校陸上部をより身近に感じることができるようにする。
展 開	2 資料を読んで考える。	○ 駅伝のメンバーから外れた時、大介はどんなことを思ったでしょう。 ・何で、納得できない。 ・あんなに頑張ったのに、信じられない。 ・くやしい。 ◎ 「そうか!」とうなずいた時、大介はどんなことに気付いたのでしょうか。 ・選手だけがチームのメンバーではない。 ・選手経験がある自分だからこそ、できることがある。 ・走る選手の不安をなくせるように頑張ろう。 ・部員みんなが心を一つにしないと優勝はつかめない。 ○ 優勝パレードで優勝旗を持った時、大介はどんな気持ちだったでしょう。 ・優勝できて本当によかった。 ・自分もチームの役に立てた。 ・陸上部全員で勝ち取った優勝だ。 ・自分ができるとは全部やりきった。満足だ。	○ 駅伝のメンバーから外れ、やるせない思いの大介の気持ちに寄り添わせる。 ○ 弾むような足取りに着目させ、大介の決意について考えさせる。 ○ ワークシートに考えを書かせ、交流する。 ☆ 自分の属する集団の意義を理解し、集団生活の向上と自己の実現との関係性について、自分なりに考えを深めることができたか。 ○ 写真を提示する。大介が笑顔なのはなぜか考えさせる。
	3 自分の生活を振り返る。	○ あなたが今、集団の一員として頑張っていること、または、これから頑張ってみようと思っていることはありますか。 ・クラブ活動で、まだ試合には出ることができないけど、みんなと一生懸命練習して、チームが勝てるように頑張りたい。	
終 末	4 メッセージを聞く。	○ 大介君からのメッセージを聞きましょう。 ・大介は、サポートを自分の役割としてがんばったから、優勝してうれしいと思ったんだ。 ・陸上部全員が心を一つにして頑張ったから優勝することができたんだ。	○ 全国大会後の満足感を伝え、一人一人が集団の一員としてがんばることが優勝という結果につながったことを感じ取らせる。

(カ) 板書例 (展開A)

心のたすきをつなぐ

大介 世羅高校陸上部
全国大会が夢

「ぼれてきそうな涙をぐっぐぐこらえた。
がっかりだ。
選手になりたかった。
チームのためには仕方がない。
走れないけど、優勝したい。
走れないほくに何ができるんだろう。」

選手として走った時のことを思い出した。

いつもそばにいてくれて安心
下見してくれた
走ることだけを考えていればいい
ありがたい
サポートしてくれた
一緒に練習して声をかけてくれた

「ちゃんとたすきをつないでいるじゃないか。」

大きくうなずくとはずむように走っていった。

サポートすることも大事な仕事だ。
ほくも仲間の一人なんだ、優勝に向けてがんばろう。
チームで勝つために、ほくもがんばろう。
選手をサポートすることでたすきをつなごう。

がんばっていること
野球部で、気合いが入るように、大きな声で
学級で、みんなが楽しくなるように

優勝パレードの
写真

インタビューを
受けている写真

優勝シーンの
写真

【板書の構成】

板書は、大介の気持ちの変化が視覚的にとらえられるようにする。そのために、児童の発言を価値ごとに、短い言葉で整理分類して書くようにする。

駅伝のメンバーから外れた場面では、落胆した気持ちを表すために黒板の低い位置に思いを書き、仲間の言葉や選手として走ったときのことを思い出す場面では、思いを少しずつ上げて書くようにする。

また、キーワードとなる言葉や発問に関わる言葉を短冊で表し、児童が考えるときの手がかかりとなるようにする。

(2) 活用のポイント

世羅町は、駅伝のさかんな町である。児童生徒の中にも駅伝の経験がある子もいれば、応援をした経験がある子もいる。全国高校駅伝がある時期になると、町のあちらこちらに「世羅高がんばれ」というのぼりが立ち、児童生徒にとって益々身近に感じることができるようになる。

駅伝と言えば、「選手がたすきをつないでいき、タイムを競う競技」ととらえられるほど、競技に出場する選手があらゆる面でスポットライトを浴びる傾向にある。

しかし、選手の回りには、選手の走りを支えている仲間たちがいることを忘れてはならない。選手たちが安心して走れるように、また、走ることに専念できるように、部員みんなを支えているのである。すなわち、駅伝で選手として走れるのはたった7名であるが、たすきは、部員みんなの手に渡り、部員みんながつないでいっていると言えるのである。

この「心のたすきをつなぐ」では、選手7名がつないでいくたすきではなく、陸上部全員がつないでいっている「心のたすき」について考えさせたいと考えた。部員一人一人が、自分のできることを考え、自分の役割を果たしてこそ、集団の目標は達成できるということや自分の役割を果たすこともまた、たすきをつないでいることになり、自己の実現につながるということを考えさせるため、「たすきをつなぐ」にこだわり、キーワードとした。

「集団の一員としての自分の役割を自覚し、集団の向上のために頑張ろうとする心情を育てる」というねらいを達成するために、次の4点の工夫を取り入れた。

ア 発問の工夫

大介がサポートをする側からの役割の大切さや、それを全うすることにより満足感を感じていることに気付くよう、集団と個人との関係性に着目し、発問を構成していく。

イ 実物や映像の活用

たすきにこめられた部員たちの思いや、つないでいくことの難しさ、つなげた時の喜びなどを気

付かせるため、導入でたすきを提示したり、DVDでたすきわたしの場面を見せ、話し合わせるようにする。

ウ 書く活動の工夫

中心場面において、考えを整理したり、より深く考えさせたりするために、書く活動を取り入れる。仲間たちとのつながり、選手として走ったときの回想シーンなどを思い起こし、つないでいるものは何なのかを考えさせていきたい。

エ 資料名の提示

「走らなくてもたすきをつないでいる」の意味を深く考えさせるために、資料名を最初に提示せず、終末で提示する。

(3) 授業の実際－児童生徒の反応を踏まえて－

ア 発問の工夫

選手に選ばれなかった場面では、大介のくやしさをやるせなさをとらえることができた。スポーツ少年団に所属している児童の中からは、「自分にできることをしよう」という意見も出された。

「そんなにすぐに、わり切って考えることができますか。」と切り返したところ、「すぐにはわり切れないけれど、チームのことを考えなければいけないと思うから。」と、チームに目を向けた答えが返ってきた。

仲間との関わりや、選手として走ったときのことを思い出す場面では、「サポートをしてもらってありがたいと思った。」「サポートをしてくれた仲間たちがいてくれたから安心して走れた。」等、仲間たちの存在に目を向けた意見が多く出された。

そして、中心発問では、「ぼくたちだって、ちゃんとたすきをつないでいる」という言葉に目を向け、チームのために自分にできることをしようとする意見が多数出された。陸上部の部員の一人としての役割を果たすことがたすきをつなぐことであり、部員全員がつないでいってこそチームの目標が達成できるのだということに気付くことができた。そして、大介が担ってきた役割の大切さやそれを自分の責任として全うした姿から、大介もまた陸上部員の一人として優勝に関わる大切

な一員だったことを感じ取ることができたのではないかと思う。

これらのことから、駅伝は個人の努力も大切であるが、チームとしてみんなでたすきをつないでいくことが大切であることをとらえやすい発問構成になっていたのではないかと考える。

イ 実物や映像の活用

導入で実物のたすきを見せることで、駅伝をイメージしやすく、また、「たすきをつなぐ」ということを意識して学習に入ることができた。

たすきをキーワードとし、こだわった結果、中心発問の中で、大介たちがつないでいるのは「たすき」そのものだけでなく、「心のたすき」をつないでいる、と考える児童もおり、ねらいに迫るために効果的であったと考える。

また、資料後半で、優勝旗を誇らしげにもつ大介の表情を見ることにより、チームの一員として役割を果たした満足感にせまることができた。

ウ 書く活動の工夫

中心場面において、考えを整理したり、より深く考えさせたりするために、書く活動を取り入れた結果、仲間の一人が言った「ぼくたちだって、ちゃんとたすきをつないでいる」という言葉に目を向け、チームのために自分にできることをしようと考える意見が多数出された。

「心のたすきをつないでいこう」と記述していた児童に対しては、「心のたすきとは、どんなことを指すのだろう。」と補助発問を投げかけた。「みんなで心をつ一つにして、練習をしていくこと。」「チーム全体で支え合ったり、励まし合ったりしていくこと。」と言う答えが返ってきた。

<児童のワークシートの記述から>

- ・全国大会で走る人をサポートして、万全の状態で走ってもらおう。
- ・ぼくが落ち込んでいたらみんなが落ち込んでしまう。仲間がいたから1位が取れたんだから、練習を一緒にしよう。
- ・ぼくもチームの一員だから仲間を支えてみんなと一緒に優勝しよう。

- ・ぼくだって5区の人のサポートがちゃんとできたら、りっぱにたすきをつなぐことができる。サポートの人がいてこそ走れるから、ぼくもがんばろう。
- ・ぼくたちがつないでいるのは、チームを支える心のたすきなんだ。

書くことにより、ねらいに迫ることができたのではないかと考える。

エ 資料名の提示

資料名を最初に提示せず、「たすきをつなぐ」にこだわって展開していったところ、児童から「心のたすきをつないでいこう」という意見が出された。「心のたすきとは何だろう」と考えを深めることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

高学年では、学校での委員会活動やクラブ活動、地域のスポーツ少年団などの集団活動を通して、責任ある役割を受けもつ経験を多くさせておきたい。

リーダーとして活躍するだけが集団の役割を果たしているのではなく、例えば、学校での集団活動では、全校が安心してスムーズに活動できるように支えていくことも大切な役割であると実感できる機会や場の設定は、高学年としての役割を果たそうという意識の醸成に役立つものとする。

(5) 心のノートの活用

集団の中で役割を自覚し、責任をもととすることをねらいとした道徳の時間の導入において、「心のノート」PP.88-91, PP.114-115が活用できる。「わたしが参加している集団とその役割」を記入させ、自分の所属している集団と役割について意識させることにより、その後の話し合いを深めることが期待できる。

委員会活動、クラブ活動、縦割り班活動などにおいて、全校をリードする立場に立つときに「心のノート」PP.88-91が活用できる。自分の所属する集団をよりよくするためにできることは何かを書かせ、節目節目でふり返りをさせると効果的である。